

ホトトギス

四月号

ホトトギス
昭和十四年三月二十八日出版
今月号は四月一日発行（第四十八巻第四号）



風雅の小筥（六十二）

廣太郎

虚子の筆跡で「ホトトギス社」と書かれた丸ビルのドアであるが、実は東銀ビルに移転する時に、このドアか、少なくともこのガラスの部分をもそのままドアの一部として使いたいとオーナー会社に申し出たのであるが、当時の防災基準では、ガラスの内部に鉄線が埋め込まれていなくてはならず、丸ビルのガラスはその基準を満たしていなかったため却下されてしまった。何とかして虚子の筆跡を残したいと思い、虚子の書いた原本を当たってみたが、ここで判った事は、虚子は二枚書いており、その内の一枚が採用された。そして調べて行く内に、一枚の存往が明らかになったのである。それはホトトギス同人で、長年ホトトギス社の事務員として働いておられた副島いみ子氏である。東銀ビルに移転する時には既に退職されていたが、俳句の御縁は続いており、早速氏に問い合わせると、快くお貸し下さったが、残念ながらドアに採用されたものではなく、少し字も歪んでいたように思う。いみ子氏は令和四年二月三日に満九十七歳で逝去されたのは記憶に新しい事である。そして採用された原本だが、聞いた話では、私の二代前の編集長の湯浅桃邑氏が貰われたが、氏はホトトギスの歴史でも有名な事故で逝去され、その棺の中にこの原本は納められたそうだ。そうして東銀ビルのホトトギス社のドアの文字であるが、何と今度は職人が丸ビルのドアに薄紙を貼り付けて文字の輪郭をなぞり、それを元に見事に虚子の筆跡で東銀ビルのドアに「ホトトギス社」と書かれたのである。丸ビルのドアであるが、その後の運命は来月に譲る事になる。

旬日記 廣太郎

令和四年四月二日 六甲会

この花に会へずに逝きし人のこと
春灯下汀子の筆致躍り出す
喪心に集ひしエープリルフル
麗かな汀子の笑顔溢る館

四月二日 芦屋ホトギス会

暮かぬるまだまだ続くエピローグ
天上に花となり旅立てる
みよし野の落花柱を供華として

四月三日 野分会芦屋例会ハイブリッド句会

ゆらゆらと根にもヒヤシンスの主張
蛤の江戸前といふ矜持かな

四月三日 青嵐会芦屋例会吟行句会

クルーザー轟めき合うて水温む
囀のウエディングマーチめく音色
舟屋めく高級住宅街うらら
松の芯喪心ほどの丈に伸び

四月六日 NHK文化センター

気紛れな空に落花の溶け込み
春惜む天寿全うせし人と
不夜城の都心臚夜遠ざけて

葬儀ミサてふオルガンのうららかに

四月七日 蕉心会

園丁の業軽やかに緑摘む
未だ居ててすんまへんなど残る鴨
温む水池の表情和らげて
蒼天に雲貼り付けて黄沙降る
漣は風の断章水温む
天国の門番めきて囀れる

四月八日 工業倶楽部

沈丁の香に包まれて棺閉づ
永き日を共に語りし日の遠く
マーラーの五番を聴いてゐる日永

四月十一日 朝日カルチャー荳蔻句会

春の星俳句の歴史一つ閉づ
君逝きて春闌といふ孤独
故郷と往復の日々亀鳴けり
花は葉に人は土へと還りゆく
春愁を解き雑踏に紛れ込む
チューリップ主を偲ぶ白さかな

四月十二日 大阪倶楽部

鎌倉はいよいよ遠く虚子忌かな
風船の赤蒼天に吸はれゆく
麗かに納骨の日の決りたる

ふはふはと風船売の歩き出す
紫は悼む心に藤の花
桜餅吉野に偲ぶ心もて

四月十三日 不動の庭で遊ぶ会

蒼天に終の色置く残花かな
囀にせせらぎの音重ねゆく
一山の靈気を納めつつ咲く
草若葉不動の庭の句読点
君手向く椿喪心誘へる

四月十四日 土筆会

麗かな昨日遠ざけ雨男
みよし野に魂預け初桜
入学児母の眼差背に受け
咲くものは皆入学を祝ひけり

四月十五日 廣邦会

春眠に始まる永久の眠りかな
蝌蚪生れて三角池の饒舌に

四月十八日 北國文芸選者吟

一山の水音聴きつつ春惜む

四月十九日 きつらぎ会

三極の花に九九乗せ帰天かな
春昼の丸の内てふ活気かな
大都市の動き緩やか春の昼

庭園の隅三極の花楚々と
四月二十一日 前議員句会

外つ国の戦の話亀鳴けり
春光を弾き議事堂鎮もれる

四月二十一日 登高会

自転車で世界一周四月馬鹿
通夜の灯の幽かに揺れて邸
桃の花咲かせ旧家に住み古りぬ
朧夜の彼方に逝きし人のこと
鐘朧光の祭儀てふ弥撒に

四月二十二日 有恒俳句会選者吟

梨の花こも売られてゆくといふ
椿寿忌や忌心一つ加へもし
天上は賑はつてをり虚子忌かな
梨の花君の心の色に咲く
忘れざる膝のぬくもり虚子忌かな

四月二十四日 青嵐会東京例会選者吟

若緑震災句碑に寄り添うて
納骨を見下してゐる夕雲雀
麗かに天使祝詞の空へ溶け
四月二十四日 野分会東京例会
ヒヤシンス水惑星の水の綾

蛤のばかと開けば祝ぎの膳

四月二十五日 カトリック新聞選者吟

暖かく天使祝詞に送られて

四月二十六日 若水句会

彼の国へ柳絮となつて逝きにけり
ふらここや地球の丸さ見ゆるまで
ふらここの揺れて愁ひを吹き飛ばす
山彦に遠足の列歪みゆく
君在す夫へ届けと半仙戯

四月二十七日 目黒学園句会

喜見城会ひたき人の現れさうな
祝ぎ心喪心集ひ夏近し
夏近し床屋混み合ふ昼下り
蜃気楼お伽の国を引き寄せて
寄り添うて二人静の孤独かな

四月三十日 芦屋ホトトギス会

行春や邸の主は風となり
藤浪の立ちて魂還りゆく

雑詠

廣太郎 選

悲しみを半分にする今日の月 横浜 小川みゆき
 飽きるほど一人の時間月今宵 同
 呆気なく金風に乗り消え去りぬ 同
 汀子忌と印刷されて初暦 岡山 伴 明子
 その事実諾へぬまま秋の逝く 同
 きらきらと露きらきらとT先生 同
 うそ寒や一喜一憂する検査 大阪 友井正明
 汀子師の墓前に行けず惜む秋 同
 汀子師の笑顔忘れぬ秋の行く 同
 一門の結束誓ひ冬ぬくし 淡路島 木下圭子
 これ程に師を恋ふ一門冬薔薇 同
 山茶花や汀子と夢に逢ふ人も 同
 汀子晴てふ秋麗の偲ぶ会 龍ヶ崎 今橋眞理子
 ひんやりと花柵の匂ふ朝 同
 落葉舞ふ静けさを積み重ねつつ 同
 語らざる墓標語らひ合ふ小鳥 大阪 酒井湧水
 焼米を頬張り挑む高き峰 同
 俳聖の句碑に擦り寄る猫の秋 同

野の心松虫草に託せし師 米子 中村囊介
 半島に触れては返す花芒 同
 鶴鴿の声の二三歩前を行く 同
 山鳴つてわづかな時雨こぼすのみ 東京 田丸千種
 洛中へ虹を落とせし時雨かな 同
 虚子塔へ供華の代はりのひとしぐれ 同
 天国の入口水平線小春 奈良 古賀しぐれ
 冬麗の海冬麗の天に果つ 同
 海濡れてをり人工島しぐれをり 同
 濡れ髪の方に夜寒の触れてぬし 神戸 和田華凜
 灘五郷西へ東へ新酒の香 同
 天国を旅して来しか帰り花 同
 流灯の君に似合へるネオン映ゆ 徳島 岩田公次
 目の前を過ぐ流灯のをさなき字 同
 上つ闇より流灯の次々と 同
 小鳥来る子の工作の巣箱にも 神戸 玉手のり子
 愛らしく鳴いて笑はぬ小鳥の眼 同
 小鳥来るたとへ一樹の倒るるも 同
 百の窓百の光に冬日和 同
 冬晴の空をひつばる鳶の声 同 涌羅由美
 冬晴にひと休みする風見鶏 同
 はや着きし朝寒残る峰の寺 長岡 安原 葉
 秋惜みつつ峰寺を辞す夕 同
 師在さず水音も小さき庭の秋 同

雑詠句評（三月号より）

汀子忌と印刷されて初曆 岡山伴 明子

飽きるほど一人の時間月今宵 横浜 小川みゆき

作者のご夫君は平成四年八月二十二日、六十九歳の生涯を閉じられた。先ず以て茲に、謹んで哀悼の意を表します。

この句は名月が詠まれた句であるが、日を数えてみるとまだ忌明け前の句であることがわかる。「飽きるほど一人の時間」という措辞には、深い悲しみの日々にも、ご夫君の生前の日に日夜献身的な看病に徹しきられた作者の心情も窺えて、清々しくさえ感じられる悲しみの心境が伝わってくるように思われる。今は亡きご夫君と心行くまで今宵の美しい月を仰いで下さい。（葉）

令和四年八月二十二日に最愛の御主人様であるホトトギス同人小川龍雄様を亡くされた作者である。例年お二人で仰いでおられた名月を一人で御覧になっている淋しさが伝わってくる。一人の時間の心情が伝わってくる。（廣太郎）

汀子師が亡くなられたのが、昨年二月十七日。「初曆」に「汀子忌」を見つけ、あらためて追悼の思いにふけっている作者。他方、「初曆」の「初」は汀子師亡きあとの再出発の決意もあらわしている。「初曆」の「汀子忌」に、この両面の思いをこめた。表現上は、「印刷されて」の「されて」に、「逝ってしまわれたのだ」という深い嘆きが見える。（中正）

毎年二月二十七日は今後汀子忌となる。お求めになったのは日本伝統俳句協会が発行しているカレンダーであろう。お手元に届き、早速二月の頁を開くと、確かに二十七日には「汀子忌」と印刷されている。しみじみと偲んでおられるのである。（廣太郎）

汀子師の墓前に行けず惜む秋 大阪 友井正明

是非とも、こうしたいものだと思いついても、自分の思い通りにならないのが世の常である。

さて掲句、令和四年二月二十七日に帰天された稲畑汀子先生の御墓前に額ずいて御冥福を御祈りしたい……。それが、実現出来

ないやるせなさを、秋惜むの季題に託した心情の深い句である。
(とほ歩)

何かの事情で汀子の墓に詣でる事が出来ないのだろうか。秋も深まり、作者にとつては歯痒い思いをされておられるのだろう。惜しくも作者は令和四年十二月十七日に亡くなられた。天国で汀子の句座に出席されておられるのだろうか。(廣太郎)

これ程に師を恋ふ一門冬蕃薇

淡路島

木下圭子

汀子先生が亡くなって、もうすぐ一年が経つ。二月末、初春だった暦が一周して初めての冬、それは汀子先生がいらない、初めての冬でもある。私が先生に最後にお目にかかったのはコロナウイルスの蔓延直前の二〇二〇年一月、オンラインでお会いしたのが半年前の二〇二一年七月。それほどにお会いすることが減っていたのに、亡くなってからの一年はそれ以前に増して先生のことを考え、近くに思うことが多い。近隣に住み、折に触れて会うこともあった作者は、どう感じるのだろうか。冬にあつて、なお咲く蕃薇は、不在よりも存在を思わせるのではないか。「恋ふ」に感じられるのは、悲しいだけではない前を向く視線だ。(敦子)

令和四年十一月に行われた関西ホトトギス俳句大会は同時に汀子名誉主宰を偲ぶ会としても開催された。遺影の周りには白い冬

蕃薇が囲んでおり、その情景であろう。ホトトギス一門の師を思う心がしみじみと伝わってくる。(廣太郎)

汀子晴てふ秋麗の偲ぶ会

龍ヶ崎

今橋真理子

二〇二二年十月二十六日、東京高輪プリンスホテルにて「汀子先生お別れの会」が行われた。まさに、汀子晴、と呼ぶにふさわしい好天に恵まれ、あちこちで久闊を叙する誌友の姿が見受けられる和やかな集まりだった。掲句について多くを語る必要はないと思うが、秋麗、の一語の持つ穏やかに澄み渡る明るさに、作の汀子師への思いが溶んでいる。(肖子)

こちらは令和四年十月二十六日に東京で行われた汀子偲ぶ会である。都内のホテルで行われたこの日は見事な晴天であった。晴女であり「汀子晴」という言葉さえ生まれた汀子の天国からの贈り物のような天気が却って悲しみを誘うのである。(廣太郎)